教育研究業績書

2025年05月07日

所属： 日本語日本文学科　　資格： 教授　　氏名： 木下　りか

研究分野	研究内容のキーワード
日本語学	意味論,文法論
学位	最終学歴
博士（学術）	名古屋大学大学院 文学研究科 博士課程 修了

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
2 作成した教科書、教材		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
4 その他		

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1 資格、免許		
2 特許等		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
4 その他		

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
1.『多義動詞分析の新展開と日本語教育への応用』（査読付）	共	2019年11月	開拓社	使用頻度が高い基本動詞の大半は、多義である。本書は、多義動詞の分析、日本語教育への応用、外国語との対照研究の知見と課題をまとめたものである。 担当部分：多義動詞における中心義のずれと語義の文体的特徴－通時的変化を背景とした共時的意味の特長―　pp.85-102
2.『認識的モダリティと推論』（科学研究費出版助成刊行物）	単	2013年3月	ひつじ書房	認識的モダリティの体系的な意味研究である。本書の分析を貫くのは、非現実世界の認識に推論が介在するという視点である。これにより、一般に人間の認識や思考を支えるとされる演繹・帰納等の推論の型、類似性・隣接性等の関係性が、認識的モダリティ形式の意味に塗り込まれているさまが詳述される。
3.『現代を生きるキーワード』	共	2012年9月	大阪公立大学出版会	「正しい日本語」という概念は多義的であり、１）コミュニケーションに便利な共通のことば、２）共通のことばではなくとも自分の話すことば、３）政治的・経済的に力を持つ者のことば、という意味で使われている。「正しい日本語」ということばを口にするとき、どの意味で「正しい」と言うのかを常に意識する必要がある。 編者：鈴木利章 担当部分：「正しい日本語」pp.56-60
4.『日本語の教育から研究へ』	共	2006年11月	くろしお出版	「ようだ」が真偽判断や直喩という多義的な意味の広がりを見せる動機は、類似性表示形式である点に求められる。類似性は類似点と相違点の二側面から構成される概念であるが、「ようだ」はこのうち類似点を焦点化し、相違点を背景化するような類似性を表す。 編者：土岐哲先生還暦記念論文集 編集委員会 担当部分：「直喩と真偽判断―ヨウダの多義性と類似点の焦点化―」pp.197-205
2 学位論文				
3 学術論文				

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
1.多義動詞の分析―特徴の記述と分析方法の精緻化―(査読付)	共	2019年6月	『日本認知言語学会論文集』第19巻 pp.519-524	多義語の分析には、複数の語義の認定と相互の関係の記述、プロトタイプ的意味の認定などの課題があり、研究の蓄積がなされてきた。これらの研究成果を踏まえ、さらに検討が必要と考えられるトピックをとりあげて、特徴記述や分析方法の精緻化を試みる。 木下りか 、李澤熊、有薗智美、野田大志、籾山洋介 担当部分：多義動詞の意味拡張の起点と直観的プロトタイプ
2.「と」条件文の成立条件―後件の予測可能性と主節のテンスとの関連から―	共	2018年3月	『日本語日本文学論叢』第13号 pp.(左)1-12	本稿は「と」条件文における前件から後件の予測しやすさ（予測可能性）と主節のテンス制約との相関について考察を行ったものである。質問紙による調査の結果、ル形の場合にのみ強い相関が見られること、また、相関では説明できないテンス制約も存在することが示された。 木下りか 、尾崎有以、中塚理子
3.文学テクストと認識的モダリティ形式―形式の選択と使用から見えるもの―（寄稿）	単	2017年10月	『表現研究』106号 pp.17-27	文学テクストの読みに文法形式が与え得る根拠について考察を行った。主に認識的モダリティ形式「ようだ」「らしい」を対象とし、これらが認識主体と認識対象とのいわゆる距離感の表示形式として機能すること、また述べる内容によっては、本来把握できるはずの自己が把握できない感覚の表現として機能することを示した上で、これらの形式の使用実態から把握できる、文学テクストの読みを提示した。
その他				
１．学会ゲストスピーカー				
1.文学テクストと認識的モダリティ形式―形式の選択と使用から見えるもの―	単	2017年6月	2017年度表現学会全国大会シンポジウム「文法論と表現論」於 成蹊大学	文学テクストの読みに文法形式が与え得る根拠について考察を行った。主に認識的モダリティ形式「ようだ」「らしい」を対象とし、これらが認識主体と認識対象とのいわゆる距離感の表示形式として機能すること、また述べる内容によっては、本来把握できるはずの自己が把握できない感覚の表現として機能することを示した上で、これらの形式の使用実態から把握できる、文学テクストの読みを提示した。
２．学会発表				
1.「雅語」と注記される動詞の意味特徴―辞書の記述を参照して―	共	2023年11月19日	日本語教育・日本語研究シンポジウム 於 香港大学	辞書における語の位相に関する記述の中で、とくに「雅語」と注記される動詞に焦点をあてて、３種の小型辞書におけるその特徴を探る。その結果これらの辞書で「雅語」と注記される動詞にずれはあるが、自然現象に関する語彙、また、一語で細やかな様態の描写力をもつなどの修辞性の高さをもつ語彙が大半を占めるという共通点があることが示される。
2.多義動詞の分析―特徴の記述と分析方法の精緻化―	共	2018年9月	日本認知言語学会 第19回全国大会 於 静岡大学	多義語の分析には、複数の語義の認定と相互の関係の記述、プロトタイプ的意味の認定などの課題があり、研究の蓄積がなされてきた。これらの研究成果を踏まえ、さらに検討が必要と考えられるトピックをとりあげて、特徴記述や分析方法の精緻化を試みる。 木下りか 、李澤熊、有薗智美、野田大志、籾山洋介 担当部分：多義動詞の意味拡張の起点と直観的プロトタイプ
3.価値判断のモダリティ「べき」の命題内容条件 ―可能形式を中心に―	単	2018年8月	日本語教育世界大会（ICJLE） 於 ベネツィア大学：イタリア	価値判断のモダリティ形式「べき」の命題内容には、意志性の関与が指摘されてきた。しかし、コーパスを参照すると、とくに意志が関与しない内容が命題内容となる場合も少なくない。本発表は、そのうち可能形式を取り上げ、「べき」の命題内容条件となり得る条件を記述する。
4.Polysemous Usages of hazuda in the English Translation	単	2017年10月	INTERNATIONAL CONFERENCE ON JAPANESE LANGUAGE EDUCATION IN MALAYSIA 於 マラヤ大学，マレーシア	This paper is a contrastive study of Japanese and English focusing on polysemous word “hazuda”. “Kokoro” by Natsume Soseki and its two translations in English are analyzed as case. In conclusion, the paper claims that “hazuda” translated into “must” can be recognized as Assertion Usage.
5.「かもしれない」の新たな用法と間主観性	単	2016年11月	第11回国際日本語教育・日本研究シンポジウム 於 公開大学：香港	「かもしれない」は、話者の願望を表す「～たい」に後接する新しい用法を持つ。本発表は、この用法の意味機能が、「フェイスへの配慮」「不確かさの表示」という従来の記述では説明しきれないことを示し、表出者としての自己の把握のありさまという観点から捉えなおす。その上で、この意味変化を言語の普遍的変化の方向性の中

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
２．学会発表				
				に位置付ける。
３．総説				
1.基本動詞ハンドブック	共	2022年2月	国立国語研究所 http://verbhandbook.ninjal.ac.jp	文の骨格を決める重要な一要素である動詞について、認知言語学や対照言語学など様々な研究分野の最新の知見を取り入れて編纂された日本語学習者用のネット版辞書である。コーパスに準拠して語義ごとにコロケーションや意味拡張を示し、視覚コンテンツを導入するなど、従来にない詳細な記述を提供している。（担当部分）「入る」の23の多義的別義とその相互のネットワーク、別義ごとに生じやすい誤用例のほか、慣用句、複合語などを示している。
2.基本動詞ハンドブック	共	2022年2月	国立国語研究所 http://verbhandbook.ninjal.ac.jp	文の骨格を決める重要な一要素である動詞について、認知言語学や対照言語学など様々な研究分野の最新の知見を取り入れて編纂された日本語学習者用のネット版辞書である。コーパスに準拠して語義ごとにコロケーションや意味拡張を示し、視覚コンテンツを導入するなど、従来にない詳細な記述を提供している。（担当部分）「入れる」の17の多義的別義とその相互のネットワーク、別義ごとに生じやすい誤用例のほか、慣用句、複合語などを示している。
3.基本動詞ハンドブック	共	2021年10月	国立国語研究所 http://verbhandbook.ninjal.ac.jp	文の骨格を決める重要な一要素である動詞について、認知言語学や対照言語学など様々な研究分野の最新の知見を取り入れて編纂された日本語学習者用のネット版辞書である。コーパスに準拠して語義ごとにコロケーションや意味拡張を示し、視覚コンテンツを導入するなど、従来にない詳細な記述を提供している。（担当部分）「温める」の４の多義的別義とその相互のネットワーク、別義ごとに生じやすい誤用例のほか、慣用句、複合語などを示している。
4.基本動詞ハンドブック	共	2021年10月	国立国語研究所 http://verbhandbook.ninjal.ac.jp	文の骨格を決める重要な一要素である動詞について、認知言語学や対照言語学など様々な研究分野の最新の知見を取り入れて編纂された日本語学習者用のネット版辞書である。コーパスに準拠して語義ごとにコロケーションや意味拡張を示し、視覚コンテンツを導入するなど、従来にない詳細な記述を提供している。（担当部分）「温まる」の３つの多義的別義とその相互のネットワーク、別義ごとに生じやすい誤用例のほか、慣用句、複合語などを示している。
5.『基本動詞ハンドブック』	共	2021年3月	国立国語研究所 http://verbhandbook.ninjal.ac.jp	文の骨格を決める重要な一要素である動詞について、認知言語学や対照言語学など様々な研究分野の最新の知見を取り入れて編纂された日本語学習者用のネット版辞書である。コーパスに準拠して語義ごとにコロケーションや意味拡張を示し、視覚コンテンツを導入するなど、従来にない詳細な記述を提供している。（担当部分）「詰める」の7の多義的別義とその相互のネットワーク、別義ごとに生じやすい誤用例のほか、慣用句、複合語などを示している。
6.『基本動詞ハンドブック』	共	2021年3月	国立国語研究所 http://verbhandbook.ninjal.ac.jp	文の骨格を決める重要な一要素である動詞について、認知言語学や対照言語学など様々な研究分野の最新の知見を取り入れて編纂された日本語学習者用のネット版辞書である。コーパスに準拠して語義ごとにコロケーションや意味拡張を示し、視覚コンテンツを導入するなど、従来にない詳細な記述を提供している。（担当部分）「詰まる」の10の多義的別義とその相互のネットワーク、別義ごとに生じやすい誤用例のほか、慣用句、複合語などを示している。
7.表現研究関連文献紹介	単	2020年4月	『表現研究』111号	森雄一・西村義樹・長谷川明日香編『認知言語学を紡ぐ』『認知言語学を拓く』（2019年 くろしお出版）の書籍紹介
8.『基本動詞ハンドブック』	共	2020年3月	国立国語研究所 http://verbhandbook.ninjal.ac.jp/	文の骨格を決める重要な一要素である動詞について、認知言語学や対照言語学など様々な研究分野の最新の知見を取り入れて編纂された日本語学習者用のネット版辞書である。コーパスに準拠して語義ごとにコロケーションや意味拡張を示し、視覚コンテンツを導入するなど、従来にない詳細な記述を提供している。（担当部分）「定める」の5の多義的別義とその相互のネットワーク、別義ごとに生じやすい誤用例のほか、慣用句、複合語などを示している。
9.『基本動詞ハンドブック』	共	2020年3月	国立国語研究所 http://verbhandbook.ninjal.ac.jp/	文の骨格を決める重要な一要素である動詞について、認知言語学や対照言語学など様々な研究分野の最新の知見を取り入れて編纂された日本語学習者用のネット版辞書である。コーパスに準拠して語義ごとにコロケーションや意味拡張を示し、視覚コンテンツを導入するなど、従来にない詳細な記述を提供している。（担当部分）「定まる」の8の多義的別義とその相互のネットワーク、別義ごとに生じ

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
３．総説				
				やすい誤用例のほか、慣用句、複合語などを示している。
10.『基本動詞ハンドブック』	共	2020年2月	国立国語研究所 http://verbhandbook.ninjal.ac.jp	文の骨格を決める重要な一要素である動詞について、認知言語学や対照言語学など様々な研究分野の最新の知見を取り入れて編纂された日本語学習者用のネット版辞書である。コーパスに準拠して語義ごとにコロケーションや意味拡張を示し、視覚コンテンツを導入するなど、従来にない詳細な記述を提供している。（担当部分）「生きる」の7の多義的別義とその相互のネットワーク、別義ごとに生じやすい誤用例のほか、慣用句、複合語などを示している。
11.基本動詞ハンドブック	共	2018年2月	国立国語研究所 http://verbhandbook.ninjal.ac.jp	文の骨格を決める重要な一要素である動詞について、認知言語学や対照言語学など様々な研究分野の最新の知見を取り入れて編纂された日本語学習者用のネット版辞書である。コーパスに準拠して語義ごとにコロケーションや意味拡張を示し、視覚コンテンツを導入するなど、従来にない詳細な記述を提供している。（担当部分）「合わせる」の９つの多義的別義とその相互のネットワーク、別義ごとに生じやすい誤用例のほか、慣用句、複合語などを示している。
12.『基本動詞ハンドブック』	共	2018年2月	国立国語研究所 http://verbhandbook.ninjal.ac.jp/	文の骨格を決める重要な一要素である動詞について、認知言語学や対照言語学など様々な研究分野の最新の知見を取り入れて編纂された日本語学習者用のネット版辞書である。コーパスに準拠して語義ごとにコロケーションや意味拡張を示し、視覚コンテンツを導入するなど、従来にない詳細な記述を提供している。（担当部分）「結ぶ」の13の多義的別義とその相互のネットワーク、別義ごとに生じやすい誤用例のほか、慣用句、複合語などを示している。
13.『基本動詞ハンドブック』	共	2017年12月	国立国語研究所 http://verbhandbook.ninjal.ac.jp/	文の骨格を決める重要な一要素である動詞について、認知言語学や対照言語学など様々な研究分野の最新の知見を取り入れて編纂された日本語学習者用のネット版辞書である。コーパスに準拠して語義ごとにコロケーションや意味拡張を示し、視覚コンテンツを導入するなど、従来にない詳細な記述を提供している。（担当部分）「そろう」７つの多義的別義とその相互のネットワーク、別義ごとに生じやすい誤用例のほか、慣用句、複合語などを示している。
14.『基本動詞ハンドブック』	共	2017年12月	国立国語研究所 http://verbhandbook.ninjal.ac.jp/	文の骨格を決める重要な一要素である動詞について、認知言語学や対照言語学など様々な研究分野の最新の知見を取り入れて編纂された日本語学習者用のネット版辞書である。コーパスに準拠して語義ごとにコロケーションや意味拡張を示し、視覚コンテンツを導入するなど、従来にない詳細な記述を提供している。（担当部分）「そろえる」の９つの多義的別義とその相互のネットワーク、別義ごとに生じやすい誤用例のほか、慣用句、複合語などを示している。
15.『基本動詞ハンドブック』	共	2017年3月	国立国語研究所 http://verbhandbook.ninjal.ac.jp/	文の骨格を決める重要な一要素である動詞について、認知言語学や対照言語学など様々な研究分野の最新の知見を取り入れて編纂された日本語学習者用のネット版辞書である。コーパスに準拠して語義ごとにコロケーションや意味拡張を示し、視覚コンテンツを導入するなど、従来にない詳細な記述を提供している。（担当部分）「張る」の18の多義的別義とその相互のネットワーク、別義ごとに生じやすい誤用例のほか、慣用句、複合語などを示している。
４．芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績				
５．報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
1.現代の語形をもつ「古い文体」の動詞―辞書における位相の記述―	単	2022年8月8日	第18回日本語教育研究集会（於 名古屋大学）	古さを感じさせるという特徴は語の位相のひとつである。本発表はこのような位相が国語辞典にはどのように記載されているか、小型辞書『新明解国語辞典』をとりあげ「雅語」「文語」「文章語」という注記に焦点を当てて調査を行う。そしてそれぞれ、擬人法などの修辞法が関与する、古語の異形である、文体の上で対立する語が存在するという傾向を指摘する。
2.モダリティ形式「べき」の命題内容と可能形式―意志による事態制御との関連から―	単	2019年8月	日本語教育研究集会（於 名古屋大学）	価値判断のモダリティ形式「べき」の命題内容となり得る可能形式に焦点を当てて記述を行った。その結果を踏まえ、従来、単に意志性を持つとされてきた命題内容条件を、意志の発動が必要十分条件とする、という条件に修正した。
3.多義動詞の意味拡張の起点と直観的プロ	単	2018年7月	第174回現代日本語学研究会（於 名古	多義語の二つの中心義（直観的プロトタイプと意味拡張の起点）は多くの場合一つの語義が担うが、複数の語義が担い、中心義にずれ

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
５．報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
トタイプ			屋大学）	が生じる場合もある。本発表は、基本動詞「解く(とく）」が後者の例であることを示し、その場合の「意味拡張の起点」がある種の文体的特徴を持つことを示す。
4.「はず」の英訳と多義性―『こゝろ』を例に―	単	2017年8月	第15回　日本語教育研究集会（於 名古屋大学）	『こゝろ』の二つの英訳と日本語とを対照することで見えてくる「はず」の多義性について考察を行い、従来とは異なる視点から多義性が記述できる可能性を指摘した。
5.「かもしれない」の意味拡張と主体の役割―「認識」から「表出的用法」へ―	単	2017年7月	第168回　現代日本語学研究会（於：名古屋大学）	話者自身の感情・感覚・願望を表す際に用いられる「かもしれない」について記述を行い、他の用法との意味的関連性（意味拡張の動機）について考察を行った。「かもしれない」の多義性は、主体の客体化を動機とすると考えることができる。
６．研究費の取得状況				
1.科学研究費（基盤研究　C）20K00652	共	2023年度		多義動詞における使用上の制約が強い語義の記述に関する研究
2.科学研究費（基盤研究　C）20K00652	共	2022年度		多義動詞における使用上の制約が強い語義の記述に関する研究
3.科学研究費（基盤研究　C）20K00652	共	2021年度		多義動詞における使用上の制約が強い語義の記述に関する研究
4.科学研究費（基盤研究　C）20K00652	共	2020年度		多義動詞における使用上の制約が強い語義の記述に関する研究
5.科学研究費（基盤研究　C）16K02748	単	2019年度		日本語の認識的モダリティ形式の多義性に関する研究
6.科学研究費（基盤研究　C）16K02748	単	2018年度		日本語の認識的モダリティ形式の多義性に関する研究
7.科学研究費（基盤研究　C）16K02748	単	2017年度		日本語の認識的モダリティ形式の多義性に関する研究
8.科学研究費（基盤研究　C）16K02748	単	2016年度		日本語の認識的モダリティ形式の多義性に関する研究
9.科学研究費（研究成果公開促進費　学術図書）245073	単	2012年度		『認識的モダリティと推論』（ひつじ書房）

学会及び社会における活動等	
年月日	事項
1.2025年4月～2026年3月	武庫川女子大学架橋的重点共同研究・グローバル共同研究支援
2.2021年4月～2022年3月	科学研究費審査委員
3.2016年4月～2020年3月	国立国語研究所プロジェクト「日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明」共同研究員
4.2013年4月～2015年3月	国立国語研究所プロジェクト「述語構造の意味範疇の普遍性と多様性」共同研究員
5.2008年4月	表現学会 2018年4月～編集委員、2019年4月～理事
6.2000年4月	日本語文法学会
7.2000年4月	日本認知言語学会
8.1996年7月	関西言語学会
9.1996年4月～2016年3月	日本語教育学会
10.1996年4月	日本語学会